

Naturalizing the South Pacific : The Representation of the Pacific Woman in the 19th-century Literature in English and Its Transformation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3997

南太平洋のナチュラルライゼーション： 19世紀英米文学における女性表象とその変移

山 本 卓

Naturalizing the South Pacific: The Representation of the Pacific Woman in the 19th-century Literature in English and Its Transformation

Taku YAMAMOTO

ヨーロッパにおける南太平洋についての文献は、18世紀後半の航海誌にはじまり、19世紀中盤の宣教師の記録、そして世紀末から20世紀前半にかけてのジャーナリストや女性による探訪記へと、時代の流れに応じてその形態を変化させる。「南海にまつわる知」という見地からすれば、それらの文献は従来の情報の修正と改編の結果といえるだろう。宣教師たちの残した日記は、探検家たちよりも現地人の生活に密着した記録であり、航海誌から漏れた知識の補完物として位置づけられる。また、世紀末から20世紀初頭の紀行文はより大衆に近い視点からの文献である一方で、南海の歴史の現状を報告し、およそ150年にわたる南太平洋の歴史を振り返ろうとする試みでもある¹。さらに、世紀末に勃興した人類学や精神分析学による太平洋民族の研究は、それまでの南太平洋観への修正として解釈できる。

イスラム圏をはじめとするアフリカ、インドといった地域での、知の蓄積・改編プロセスはサイドの『オリエンタリズム』において論じられているが、本論文では南太平洋に関する知の収集と応用、そしてそれに伴う西洋文化との同質化と差異化を「ナチュラルライゼーション」として規定しようと思う。その理由として、ナチュラルライゼーションという言葉が持つ多義性

が挙げられる。この言葉を「自然化・脱神秘化」として捉えた場合、18世紀後半から19世紀を通じて行われた、南太平洋の知識の蓄積がそれに相当する。古くは南海大陸の存在が信じられていたように、ヨーロッパ文明から最も離れた場所にある南太平洋は、西洋人の意識において想像の世界でしかなかった²。それが数々の調査の結果、地理、動植物、現地人やその習慣といった「現実」の南海像がヨーロッパに紹介されることになる。すなわち、冒険家たちによって、想像の南太平洋は現実のものへと脱神秘化されるといえる。また、19世紀後半に登場する文化人類学や精神分析学は、それまでの南太平洋像に新たな解釈を試みる。とりわけフロイトやデュルケームが現地の習慣であるタブーに着目し、人類学的な知識を人類全体の法則へと広げようとしたことは、「帰化・概念の移入(応用)」という、ナチュラルライゼーションの別の側面を象徴する。しかも、彼らの分析は、西洋文化のなかに南太平洋を位置づける、いわば同化のベクトルと平行して、南太平洋と西洋との間に新たな差異化の手段を探るのである。

社会歴史的な南海文化に関する知の蓄積と改編は、南太平洋を舞台とする文学テキストにも大きな影響を与えてきた。メルヴィルの処女作『タイピー』はデイヴィッド・ポーターの『太

『平洋就航日誌』（1815）やウィリアム・エリスが著した『ポリネシア研究』（1833）といった先行記録なしには成立し得なかったし、ヴィクトリア中期のバラントインやマリアットの冒険小説が人気を博したのも、南海に関する知識が少年層にまで流布していたという事実が決定的な要因となる。19世紀末にサモアに移り住んだステューヴンソンが「ファレサアの浜」の執筆時に、先行作家による南海物語の傾向からの決別を宣言したこと³は、文学テキストにおける南太平洋像の修正を含意する。さらにモームの太平洋小説群にいたっては、現地の習慣や雰囲気は奥地でしか体験できないものとなり、そこには神秘性の残余が存在するだけである。もちろん南太平洋を扱った英米の文学テキストは、単に歴史の諸事象をなぞるだけではなく、それらをもとに独自の作品世界を構築するため、歴史文献のように直接的な南太平洋像を提示するわけではない。しかし、作品創作においてなされる加工こそが、ナチュラルライゼーションのプロセスを象徴すると考えられるのである。

本論文は文学作品における南海像、とりわけ西洋における南海イメージに大きな位置を占める現地女性像の表象⁴に着目し、同質化と差異化というナチュラルライゼーションの過程を分析する。『タイピー』、『珊瑚島』、『ファレサアの浜』を横断的に扱い、そこで提示される女性表象の変化を検証することで、作品の背後にある南太平洋についてのイデオロギーと文学テキストの相関関係を示す。

I タヒチの女

1766年から1769年にかけてフランス人探検家ブーガンヴィルは、ブードゥーズ号とエトワール号の二隻の船に300人以上の船員を引き連れて世界一周の探検に出発する。そして帰国後、航海の記録を1771年に『世界周航記』としてまとめる。各地の動物層や植物層を調査する一方で、現地人の習慣も詳細に綴っているが、なかでも後世のヨーロッパ人の南海像の形成に

寄与するのが、1768年4月にタヒチに停泊したときの記述である。

The piraguas were full of females; who, for agreeable feature, are not inferior to most European women; and who in point of beauty of the body might, with much reason, vie with them all. Most of these fair females were naked; for the men and the old women that accompanied them, had stripped them of the garments which they generally dress themselves in. ... They [the men] pressed us to choose a woman, and to come on shore with her; and their gestures, which were nothing less than equivocal, denoted in what manner we should form an acquaintance with her. It was very difficult, amidst such a fight, to keep at their work four hundred young French sailors, who had seen no women for six months. (217-8)

投錨してしばらくすると岸の方から無数のカヌーがやってきて、ブーガンヴィルの船に「タヨ（友よ）」と声をかける。そして裸の現地女性を満載したカヌーが姿を現す。女性たちの顔立ちと体の美しさはヨーロッパ女性と遜色なく、半年にわたる禁欲生活を経た水夫たちにはきわめて刺激的だった、とブーガンヴィルは述べる。この後、さらに女性についての記録が続き、船員の監視をかいくぐって船に忍び込んだ別の女性が、錨の巻き上げ機のところまで服を脱ぎ、船員たちの目を釘付けにする様子が描かれる。

ジェームズ・クックもまた、1769年にタヒチを訪れたとき、ブーガンヴィルと同様の経験をする。5月12日の記録は、植物学者バンクス卿に現地人が貢ぎ物の布を渡すときに行われた風変わりな儀式に言及しており、そこには、男性（クックによると同行の女性の召使い）が地面に布を広げると、若い女性の一人が布の上で、「想像もつかないような無邪気な様子で、腰か

ら下を完全にあらわにして、一度か二度身体を回転させた」(52)とある。さらに5月1日の日誌には、クック一行の前で行われた男女の儀式が報告されている。

... this day closed with an odd Scene at the Gate of the Fort where a young fellow above 6 feet high lay with a little Girl about 10 or 12 years of age publicly before several of our people and a number of the Natives. What makes me mention this, is because, it appear'd to be done more from Custom than Lewdness, for there were several women present particularly Obarea and several others of the better sort and these were so far from shewing the least disaprobation that they instructed the girl how she should act her part, who young as she was, did not seem to want it. (52-3)

直接的な描写を避けているものの、ここに書かれていることが性愛の儀式であることは疑いようがない。クックは、長身の男性が処女と公衆の面前で交わる様子を「習慣」として扱い、冷静に記録しようと努めるが、儀式を取り囲む女王オバレアや身分の高い女性までもが積極的に少女に姦通を勧める有り様は、むしろ読者に強烈なエロティシズムの印象を与える。タヒチに9日間滞在したブーガンヴィルの報告には船員と現地人女性との間の情交が明示される一方で、3ヶ月もの間、同地にとどまったクックの一回目の航海記においてはそういった記述は省かれている。マイケル・スターマはこの省略を、クックが既婚者であったこと、またフランスとイギリスの国民性の違いのためと推察するが⁵、長期滞在のクック一行がブードゥーズ号とエトワール号の先例に倣ったことは想像に難くない。実際、1773年9月の日誌で現地に蔓延する性病に言及し、そのなかで現地人の一般階級の女性と船員とが活発な性交渉を繰り返していたことを仄めかしている。

しかしながら、タヒチは単に性的に横溢なだけの空間ではない。再びブーガンヴィルの日誌に目を向けると、フランス人探検家がそこに理想郷を見いだしていたことが分かる。たとえば、船のなかに忍び込んだ現地人女性は、「フリギアの羊飼いの前にウェヌスがさらけ出したような、天上界の女神のような肢体を持っていた」(219)と表現される。また、男性についても白人男性の理想像のごとく描かれる。

I never saw men better made, and whose limbs were more proportionate: in order to paint Hercules or a Mars, one could no where find such beautiful models. Nothing distinguishes their features from those of the Europeans: and if they were clothed; if they lived less in the open air, and were less exposed to the sun at noon, they would be as white as ourselves: their hair in general is black. (249)

ブーガンヴィルは、タヒチ島の奥地の景色についても「エデンに連れてこられたような」(228)感覚を覚えたと言懐する。エデンの園に住むヘラクレスやマルスといったギリシアの神々という構図を、クックの記述に適用するとき、現地の性愛の儀式はあたかも天上界で交わる神々の姿として浮かび上がる。

もちろんこのイメージは二人が抱いていた「楽園としての南太平洋」というヨーロッパのイメージの投影であり、彼らをもてなしたポリネシア人の意図は実際的なものである。一つには西洋探検家の圧倒的な軍力であろう。大砲を26門も備えた大型の帆船とその随行船、さらにはマスカット銃で武装した多数の水兵を引き連れたブーガンヴィルの一軍は、原始的な武器しか持たないタヒチ人にとっては攻略不能の敵であったし、「タヨ」と呼びかけることで、ヨーロッパ人の無用な敵対心を煽ることを避けたとはいえる。もう一つは探検家一行の持っていた物資、とりわけ金属である。鉄鉱石の産出も加

工技術もないタヒチの人々には、金属製品はきわめて貴重なもので、女性を献上する対価として船の補修に積載されていた釘などを求めたのだ。興味深いことに、こうした行為を後の歴史家は売春とはみなさなかつたという⁶。その結果として「純粋な快樂の場としての南太平洋」の構図を強調することになるのである。

自由な性空間という南海のイメージを広く普及させた事件が、1789年に起こったバウンティ号の反乱である。軍艦バウンティ号の艦長ウィリアム・ブライが、5ヶ月間のタヒチにおける植物採取ののち、トンガ沖で上級士官フレッチャー・クリスチャンらに強奪され、その後非常に困難をくぐり抜けてイギリスに帰郷するという物語は、1790年にブライ自身の手によって『バウンティ号船上における反乱』としてまとめられる。出版されると同時に一躍ベストセラーとなり、その後、劇化されて好評を博した。一般の注目を集めたのは、反乱水夫たちの陰謀もさることながら、彼らがタヒチ人とともにピトケアン島に移住したことである。南の島に現地人の女性とともに新生活を起こすというモチーフは、グリーンが提言するロビンソン・クルーソー系譜の現実版である。しかも、水夫たちの反乱は、当時のヨーロッパで勃興しつつあった民主主義的な概念—体制への反抗と自由の希求—と共鳴する。バウンティ号の反乱はこうした民衆の願望を充足させる「物語」を内包しており、その舞台となった南太平洋は、ヨーロッパ人男性の理想郷へと転化された。さらに、その後続くバウンティ号に関する様々なテキストは、反乱船員たちとタヒチの娘たちの性交渉を脚色し、「おだやかなボルノ」といった様相を帯び始める⁷。バウンティ号の物語が表象する、南海の理想郷、冒険、性という三要素は、タヒチのみならず、南太平洋を表す一般的なイメージとして受け継がれ、冒険小説において顕著なものになる。

II メルヴィルとバランタインの南太平洋

1846年にハーマン・メルヴィルが発表した『タイピー』は、ロンドンのマレー社からは『マルケサス諸島の一溪谷の原住民と暮らした四ヶ月間の滞在記』という旅行記の体裁で出版された。出版後、批評家たちが作品の信憑性についての疑惑を訴えたが、1846年7月にトウビー本人が名乗り出て、メルヴィルと行動をとともにした期間の出来事を事実として認知したため、この問題は不問に付される⁸。しかしながら、1939年にC. R. アンダーソンがメルヴィルの航海記録をたどり、実際に作者がタイピー溪谷に滞在したのは4週間にすぎず、作品のかなりの部分を同時代の航海記から援用したと指摘する。文学作品と歴史の連関を探るとき、『タイピー』が、メルヴィルが現実に体験した事実と、それ以前の歴史的な文献とが織り交ぜられて創作された物語であるということは注目に値するだろう。とりわけ、作品がイギリスでノンフィクションとして発表された事実は、現実の南太平洋と虚構の南海との境界の曖昧さを示すし、19世紀の中頃においてもなお先行する南海テキストが提供した南海のイメージが、大きな影響力をふるっていたことを物語る。

過去に作られた南海イメージは『タイピー』でも反復され、読者にその正当性を訴える。ブーガンヴィルやクックによる記録と同様、性の場としての南太平洋は『タイピー』の冒頭で再現される。

All of them at length succeeded in getting up the ship's side, where they clung dripping with the brine and glowing from the bath, their jet-black tresses streaming over their shoulders, and half enveloping their otherwise naked forms. There they hung, sparkling with savage vivacity, laughing gaily at one another, and chattering away with infinite glee. Nor were they idle the while, for each one performed the simple offices of the toilette for the other. (14)

語り手はここで約 70 年前にブーガンヴィルが行った記述を追体験する。船によじ登り、肌には海水を滴らせながら水夫たちに媚態を誇示する様子は、『世界周航記』に書かれた「ウェヌス」を連想させる。実際、語り手は現地人の女性を「とびきりの若さ、透明感のある薄い褐色の肌、上品な顔立ち、筆舌に尽くしがたい優雅な姿、ゆるやかに丸みのある肢体、気取りのない動作」(15) といった言葉を用い、「妖精の一团」と締めくくるのである。また、ブーガンヴィルの時代は岸に上がって行われた女神と水夫の交歓は、『タイピー』においては船上での饗宴となる。

Our ship was now wholly given up to every species of riot and debauchery. Not the feeblest barrier was interposed between the unholy passions of the crew and their unlimited gratification. The grossest licentiousness and the most shameful inebriety prevailed, with occasional and but short-lived interruptions, through the whole period of her stay. (15)

イギリス版のテキストでは削除されたこの引用において、メルヴィルは西洋人への批判を意図するのであるが、それまでの数ページにわたる女性の描写によって、かえって奔放な性欲の発散の場という南太平洋の特徴を印象づけることになる。ブーガンヴィルやクックの航海記よりもより生々しく、また、彼らの時代よりもさらに組織化された女性たちの集団を表象することで、『タイピー』は伝統的な南海イメージを回復・強調するのである。

メルヴィルは先行テキストが表象した太平洋像を単に繰り返すだけにとどまらず、主人公である白人男性トムと現地人女性ファヤウェイとの恋愛という領域に踏み込む。性的な快樂の手段としてのポリネシア女性ではなく、恋愛の対象としての女性像を読者に提示するのである。もちろんバウンティ号の乗務員がタヒチの女性たちと理想郷の建設を目指す裏には、当然のこ

とながら女性への愛情という要因が不可欠であろう。しかし、先にも述べたようにその後の脚色によって性描写が強調されることになり、性の場としての太平洋像を強化するものとなる。『タイピー』においては、トムの軟禁によって停滞する冒険譚を補完するかのように、主人公の抱くファヤウェイへの想いが詳細に綴られ、プロットの重要な部分を形成している。こうした表象は、本格的な植民地拡大の時代を迎えようとする 19 世紀中頃においては、征服者と被征服者の差異化という点で問題を孕む。西洋人が個としての現地人女性を認め、彼女にのめり込むことは、西洋による支配を肯定する「優れた西洋人と劣った未開人」という図式を根底から覆す行為になりかねないのである。

西洋人と南太平洋の人々との差異化を考えるとき、R. M. バランタインの『珊瑚島』(1858)が有用な指標となる。一つはこの作品が南太平洋を扱ったヴィクトリア朝中期の代表的な小説だということ、また少年向けの冒険小説であることから、成人を対象とする小説よりも、当時の社会的な道徳観、とりわけ少年に期待される倫理を直接的に表しているからである⁹。

『珊瑚島』の物語構成は、前半部と後半部の二つに大別される。前半は少年たちの島の探検が中心に据えられていて、南太平洋の自然環境の紹介やロビンソン・クルーソー的な生活実践の方法の提示など、あたかもサマーキャンプ体験のような様相を呈している。一方、後半部ではテンポの速い冒険物語の体裁を取り、海賊による主人公ラルフの誘拐、仲間のもとへの帰還、サモア人女性の救出、そして宣教師による秩序の回復を描く。換言すれば、『珊瑚島』はそのストーリーの展開につれて、自然科学的な知識の普及という百科全書的な視座から、西洋人(キリスト教)による異境の地の秩序化を肯定する植民地主義的イデオロギーな立場へと、作品の焦点を移行させるのだ。

ここで指摘したいのは、作品における西洋人

と現地人とを分断する明確な境界線である。『タイピー』とは異なり『珊瑚島』に登場する主人公は未成年であるし、小説が想定する読者年齢も低いことから、男女の露骨な性愛を描くことは不適當だろう。そもそも物語に登場する女性はアヴァテア一人で、彼女の描写にしても性的なものを連想させる記述はほとんど見あたらない。『タイピー』で船員たちを魅了した女性の肉体美は、『珊瑚島』では言及されることがない。テキストが強調するのは、アヴァテアのポリネシア的側面である。

... but, before doing so, Tararo went up to Jack and rubbed noses with him, after which he did the same with Peterkin and me! Seeing that this was their mode of salutation, we determined to conform to their custom, so we rubbed noses heartily with the whole party, women and all! ... Besides her modest air and gentle manners she was the only one of the party who exhibited the smallest sign of regret at parting from us. Going up to Jack, she put out her flat little nose to be rubbed, and thereafter paid the same compliment to Peterkin and me. (186)

この別れの挨拶からは、ブーガンヴィルたちが記した天上の女神の姿を想像することは難しい。サモア人独特の平べったい鼻と黒い肌（主人公たちはアヴァテアを「黒い色の女の子」(279)と呼ぶ）は、エキゾチズムを喚起するのではなく、むしろヨーロッパ女性との差異を際立たせる。また物語の展開においても、アヴァテアを無力で従順な女性として描くことで、少年がイギリス紳士にふさわしい庇護者役に徹する状況を作り出す。さらに、彼女の許嫁はキリスト教徒の現地人であり、男女関係は同一人種に限定される。宣教師を含めた西洋人は徹頭徹尾、現地人の教化者であり、白人の領域と南太平洋の人々はけっして混交しない。こうしてイギリス

人かつキリスト教徒である3人の少年は、あたかも異教徒に対する指導者として振る舞うことが可能になる。

『珊瑚島』における西洋と非西洋を分断する明確な境界線は、『タイピー』ではきわめて曖昧である。そもそも軟禁状態におかれたトムは、現地人の啓蒙という植民地主義の白人の特権を行使できないし、また、ラルフたちには許されなかった異人種の女性との混交によって境界線を横断し、西洋人としてのアイデンティティを危険にさらす。自らの白人性を保証するために主人公が採用する方法は、一つにはファヤウエイを他のタイピー族から差別化すること、もう一つは現地人男性と白人との差異化という二重のプロセスである。

語り手は現地人の愛人を過剰なまでに賛美することで、彼女を特別なタイピーにしようと腐心する。ファヤウエイは主人公の「とびきりのお気に入り」で、彼女の肢体は「女性的な優美さと美しさの極致」(85)とされる。トムの視線は全体像から、顔、唇、髪、瞳、手、足へと続く。顔色は「豊かで赤みの差したオリーブ色」、顔の形は「人間が思い描ける限りの完璧さ」、開いた唇からは「目もくらまんばかりの歯」がのぞき、彼女がかがみ込むと豊かな髪は「その胸を隠す」(86)といったように、16世紀のソネットのような完全美が強調される。さらに、手や足の表現については、南太平洋と異なる文化圏の女性を比較の対象とし、ファヤウエイの美しさを様々な尺度を用いて褒め称える。たとえば、手は「どんな伯爵夫人にも見劣りしないほど柔らかで繊細」であり、足は「リマの女性のドレスの足下から覗くような、小さくて美しい形をしている」(86)のだ。

しかし、現地人の間に暮らすトムは否応なしに、ヨーロッパの審美基準に適合しないファヤウエイのポリネシア的な側面に直面せざるをえない。入れ墨をはじめ多数の習慣に言及しているが、なかでも生魚を頭から食べる恋人の姿に、

主人公は強い違和感を覚える。

Raw fish! ... Fayaway, how could you ever have contracted so vile a habit? However, after the first shock had subsided, the custom grew less odious in my eyes, and I soon accustomed myself to the sight. Let no one imagine, however, that the lovely Fayaway was in the habit of swallowing great vulgar-looking fishes: oh, no; with her beautiful small hand she would clasp a delicate, little, golden-hued love of a fish, and eat it as elegantly and as innocently as though it were a Naples biscuit. But alas! it was after all a raw fish; and all I can say is, that Fayaway ate it in a more ladylike manner than any other girl of the valley. (208)

ここで語り手は西洋的な価値観と個人的な感情との間で揺れ動く。生魚を食することを「卑しい習慣」と考えるトムはファヤウェイとの差異を意識し、「生魚」を「ナポリ風の細長いビスケット」に言い換えるなど、様々な言葉でその妥協点を探り、現地人の女性の性質を、白人女性のそれに近いものとして表象しようと試みる。生食への嫌悪感によって、最終的には「結局のところ生魚は生魚」と認めざるをえないが、そこに至っても彼はなおファヤウェイの食事の仕方が「タイビー溪谷の女性のなかでいちばん気品があった」と現地女性からの差別化を図ろうとする。

一方、『タイビー』におけるポリネシア男性と白人との境界線は喰人の習慣の有無で構築される。興味深いのは、喰人習慣が現地のジェンダーと密接に関わる事項として記述されていることだ。

Everything, in short, strengthened my suspicions with regard to the nature of the festival they were now celebrating; and which

amounted almost to a certainty. While in Nukuheva I had frequently been informed that the whole tribe were never present at these cannibal banquets; but the chiefs and priests only, and everything I now observed agreed with the account. (237)

マルケサス諸島において、饗宴に出席するのが酋長や聖職者に限定されていることは、とりもなおさず喰人が男性だけの行為であることを意味する。トムはその軟禁生活の間中、タイビー族の男性が野蛮な喰人族ではないかという疑念にとらわれ続けるが、ここでも男性を強調することで、女性を喰人種の範疇から除外しようとする。ファヤウェイに向ける主人公の感情が喰人種の女に対する愛情ではないという意味において、語り手は彼の恋愛が西洋の文化規範にとって安全なものだと暗示するのである。しかし、テキストは最終的にトムとファヤウェイを地理的に分断することで、西洋人と非西洋人との間に境界線を再構築する。主人公の西洋文明への帰還によって人種の混交は解消され、西洋人とポリネシア女性はしかるべき場所へ身を置くことになる。

III 「ファレサアの浜」における人種の混交

ライオネル・ジョンソンが「すべての世界は人の知ることになり、(中略)我が国の芸術家は中国からペールへと飛び回っている」(418)時代と表現したように、19世紀末の地球にはもはや見知らぬ土地は存在せず、『珊瑚島』や『タイビー』が描いた楽園としての南太平洋の姿もない。ロンドン宣教師協会を中心にしたキリスト教の布教活動は19世紀後半までにはほぼ完了し、現地人の宣教師も出現し始める。サモアのアピアをはじめとする良港は貿易の拠点となり、多くのヨーロッパ人が居住していたし、周辺の島々でも西洋人はけっして珍しいものではなくなった。「ファレサアの浜」が背景に持つ南太平洋は、もはやヨーロッパ船に群がる裸体の乙女

も、部族闘争に明け暮れ人肉を食らう未開人も姿を消してしまった世界なのである。

物語は貿易商ウィルトシアが島の貿易出張所に赴任する場面から始まる。数年間様々な島々で孤独な生活を送った後、主人公は貿易商の白人ケイスが暮らすファレサアの浜へと降り立つ。そして、島に着いたその日、ウィルトシアはケイスの勧めで現地の女性を物色する。

There was a crowd of girls about us, and I pulled myself up and looked among them like a Bashaw. They were all dressed out for the sake of the ship being in; and the women of Falesá are a handsome lot to see. If they have a fault, they are a trifle broad in the beam; and I was just thinking so when Case touched me.

"That's pretty," says he.

I saw one coming on the other side alone. She had been fishing; all she wore was a chemise, and it was wetted through. She was young and very slender for an island maid, with a long face, a high forehead, and a shy, strange, blindish look, between a cat's and a baby's. (5)

白人貿易商の目を引こうと現地人の女性が集まっているが、裸体ではなく服を身につけているし、美人ではあっても広すぎる顔幅は女神の容貌とは符合しない。主人公の妻となるウマにしても、面長な顔と広い額は美の典型とはならない。また、彼女が「ほっそりしている」のは、あくまでも現地女性と比較した場合のことで、ファヤウエイに捧げられたような美の賛美はここにはない。とりわけ注目したいのが、引用中にある"shy"という形容詞である。バリー・メニコフによると、この言葉はスティーヴンソンが書いた原稿においては、"sly"となっており、「ファレサアの浜」の出版時に行われた編集者たちによる改稿で修正が加えられたという¹⁰。もしそうであれば、「内気な」ウマの外見の様子

は、「少し狡猾そうな」眼差しとかなり異なったものになる。しかもその後続く"strange"や"blindish"といった言葉も、肯定的な意味合いの形容詞としては解釈できなくなる。

現地女性の扱いに目を向けても、『タイピー』までの時代とは一線を画す。『タイピー』においてトムとファヤウエイの関係は一時的なものであり、彼の脱出時にその関係は清算される。これとは逆に、「ファレサアの浜」では現地人の妻への忠誠を果たすイギリス人男性の姿を繰り返して表象する。物語の最後にウィルトシアは、青春期を過ぎてすっかり外見が変化して「力強い大柄な女性」になったウマについて言及するが、それでもなお「第一級の妻」(75)であると語る。悪辣な商人のケイスにしても、サモア人の妻に関しては配偶者想いの紳士として描かれている。

She was a Samoa woman, and dyed her hair red, Samoa style; and when he came to die (as I have to tell of) they found one strange thing—that he had made a will, like a Christian, and the widow got the lot: all his, they said, and all Black Jack's, and the most of Billy Randall's in the bargain, for it was Case that kept the books. So she went off home in the schooner Manu'a, and does the lady to this day in her own place. (4)

本人の死後も妻には裕福な生活を送れるように配慮する白人男性の姿は、本作品に限ったことではなく、同時代のルイス・ベックの南海物語にも特徴的な男性表象である。スターマはこうした表象を、「魅力のある島の女性の存在は、(国内で結婚や家族を持つことが叶わない中流階級の)男性読者の男性性を保証する」(116)現象として解釈するが、男女間の人種越境が珍しいものではなく、人種がもはや白人とポリネシア人を差別化する指標としては機能しないことを意味する。しかし、テキストは19世紀末にヨーロッパで勃興する人類学や精神学といった

新たなディスコースに呼応して、新たな境界線の構築を図るのである。

「ファレサアの浜」はウィルトシアがケイスによる策略に捕まり、宣教師タールトンとウマの精神的な支援を受けながら、ケイスと対決する物語だが、ストーリー上の鍵となるのが南太平洋に広く行き渡っているタブーの習慣である。ウィルトシアが島での交易ができなくなるのは、一つにはウマ自身がケイスの力で村のタブーとされているためだ。その一方で、ケイスはジャングルの奥に神殿を造り、そこで悪霊と交霊しているという噂を流すことによって、彼自身をタブー化している。こうした状況でウィルトシアが交易を再開するために、ケイスの力の源泉を暴こうとするのは、タブーを解体する作業にほからない。

もちろんタブーの習慣は、『珊瑚島』や『タイピー』においても言及されている。しかし、それらの作品はタブーの性質を追求することはせず、『タイピー』のように「タブーを強制している力がいったい何なのか、なにかしらの確信を持って結論づけることはできない」(224)とそれ以上の探求を行わない。他方、ウィルトシアはタブーを徹底的に解明しようとする。ファレサアでのケイスの権威の拠り所を同定するために、彼は不気味な音が鳴り響くジャングルへと足を踏み入れる。

... so I plumped on my knees and prayed out loud; and all the time I was praying the strange sounds came out of the tree, and went up and down, and changed, for all the world like music, only you could see it wasn't human—there was nothing there that you could whistle. ...

A box it was, sure enough, and a candle-box at that, with the brand upon the side of it; and it had banjo-strings stretched so as to sound when the wind blew. I believe they call the thing a Tyrolean harp, whatever that may mean.

(55-6)

恐怖のあまり神への祈りを捧げながら、主人公がこわごわジャングルの空き地に見たのは、横に蠟燭の商標名が書かれた、ただの「箱」である。風が吹くと音が出るような細工をした子供だましのがらくたなのだ。さらにジャングルを分け入り、ケイスの神殿にたどり着いたとき、その祠が岩に蛍光塗料を塗ったものにすぎないことをウィルトシアは発見する。タブーを操る敵の権威が、西洋ならば「子供のおもちゃ」(57)の寄せ集めであることを見極めた瞬間、ケイスに漂う神秘のオーラは説明可能なものとなり、消失する。さらに、主人公の語りはこれらの玩具を畏れる現地人の心理に焦点が移る。

It's easy to find out what Kanakas think. Just go back to yourself any way round from ten to fifteen years old, and there's an average Kanaka. There are some pious, just as there are pious boys; and the most of them, like the boys again, are middling honest and yet think it rather larks to steal, and are easy scared, and rather like to be so. (58)

ブーガンヴィルやクックがその対策に頭を悩ませたポリネシア人の窃盗癖に加えて、ウィルトシアはタブーを信じる島民の心理状態を「子供のそれ」として位置づける。重要なことは、彼がこの結論に至るのは、『タイピー』のトムのように軟禁下に置かれた傍観者として現地を観察した結果ではなく、現地の社会の中に入り、現地人と一緒になってコプラを栽培し、内側からファレサアの社会を観察した、いわば文化人類学的な視点から得たものであることだろう。島民と言葉を交わし、ポリネシア人の妻を愛し、妻との間に子供をもうけて島の生活に溶け込んだ白人が、最終的に下す判断が子供としての島民なのだ。もちろん未開民族を子供として位置づける思考方法は、「ファレサアの浜」に特有の

現象ではなく、『タイピー』や『珊瑚島』にも出現するし、そもそもキリスト教による啓蒙活動自体、このような価値判断と不可分な関係にある。しかし、19世紀末の思想背景に着目すると、ウィルトシアによる分析はテキストと歴史的なイデオロギーとの連動を示唆するのである。

IV ヨーロッパにおけるタブーの解釈

18世紀にタブーの習慣がヨーロッパに紹介されて以来、タブーは西洋人の関心を引いてきたが、とりわけ19世紀末から20世紀初頭にかけて、この風習についての人類学的見地からの論考が盛んになる。デュルケーム、フレイザー、フロイトといった思想家たちがタブーを取り上げ、その分析を試みるのである。これらの思想家とほぼ同時代に書かれた「ファレシアの浜」がタブーを中心に展開すること、またテキストにおけるタブーが『南海にて』でステューヴンソンが観察した事象と無関係ではないことを考慮すると、文学テキストとそれを取り巻く歴史の関心の一致を単なる偶然として看過することはできないだろう¹¹。とりわけフロイトが精神分析の手法を用いて、タブーの「科学的な」解釈を行ったことは注目に値する。

「トーテムとタブー」で、フロイトはタブーの思考様式を「今なお我々の内部に残存する」(xiv)と主張し、西洋人とポリネシア人を同一の尺度のもとに取り扱う。そして、タブー的な考え方をヨーロッパ人の強迫症者の思考形態に合致するものと見なす。

He has come across people who have created for themselves individual taboo prohibitions of this very kind and who obey them just as strictly as savages obey the communal taboos of their tribe or society. If he were not already accustomed to describing such people as 'obsessional' patients, he would find 'taboo sickness' a most appropriate name for their

condition. (26)

フロイトの理論において、強迫症は肛門期への退行を示す精神疾患として位置づけられる。フロイトは人間の精神発達の過程をリビドーの発達段階として説明する。赤ん坊の意識は口唇期、肛門期、男根期などを経て、自我を獲得する性器段階へと移行するが、強迫症は性器段階から肛門期への「退行 (regression)」として解釈されるのだ。強迫神経症者は自らの退行に抗おうとする葛藤の結果、意識される精神活動と無意識の精神活動の分裂を抱え込む(324)。しかし「退行」という言葉が示すように、フロイトの精神分析には進化論的視点が存在する¹²。20世紀初頭の「科学的な」分析は強迫症者を成熟した大人ではなく、未熟な子供として扱うのだ。これを「トーテムとタブー」の文脈に適用するとき、未開人に相当する文明人とは神経症者であり、未開人は人格的に未分化な状態の子供となる。

ウィルトシアとフロイトが共有する、「ポリネシア人＝西洋人の子供」という認識によって示唆されるのは、非西洋人に対する西洋人の優位性であり、未分化な文化形態に対する分化した西洋文明の卓越性という、植民地主義の根幹を形成する言説である。本人が意図したものではないにせよ、ウィルトシアは現地の生活に入り込み、人々を観察し、結果的にタブーを解明する。そして、南太平洋から西洋に向けて物語を発信することで、喰人や性という明確な指標が消え去り、西洋化された19世紀末の南海と西洋との間に、人類学に倣ったより巧妙な境界線を引くのである。

V 境界線の再構築

タールトンはケイスを倒したウィルトシアに、「私はあなたとここの人々との関係を公正なものにしましたよ」(74)と言い、ファレシアを離れる。主人公はコブラに水をかけて重量を増やすファレシアの人々に頭を悩ませながらも南太

平洋の地に留まる。

Mr. Tarleton's gone home, his trick being over. ... Well, that's best for him; he'll have no Kanakas there to get lunny over.

My public-house? Not a bit of it, nor ever likely. I'm stuck here, I fancy. I don't like to leave the kids, you see: and—there's no use talking—they're better here than what they would be in a white man's country, though Ben took the eldest up to Auckland, where he's being schooled with the best. (74)

子供のために南海を離れることのできないウィルトシアの姿は、『タイピー』や『珊瑚島』の主人公たちとは対照的で悲哀に満ちている。パブを経営するという夢を断たれたばかりか、混血児である彼自身の子供の将来という問題に直面するのである。ウィルトシアによるタブーの分析が西洋と南太平洋の間に新たな差異を構築した一方で、西洋と非西洋を横断し越境した彼はもといた場所へと戻ることができない。テキストはこうして南太平洋の事象をナチュラルライズし、西洋の規範にとって無害なものに変容させるのである。

ここまで論じてきたように、19世紀の英米文学における南太平洋の女性表象は、西洋人と非西洋人とを隔てる境界線を巡る交渉の過程である。先行する歴史テキストが提示する南海イメージを咀嚼し、新たな要素を付け加えて構築するテキストの物語空間において、登場人物は常に西洋の規範から逸脱する危険性を孕んでいる。『タイピー』と『ファレサアの浜』が表象するのは、境界を越境した主人公が自らの白人性を意識し、その自己認識の正当性を再現しようとする行為であり、規範を遵守する『珊瑚島』の3人の少年は経験することのない領域である。しかしながら、トムとウィルトシアは対照的な結末を迎える。人種間の混交を冒険の思い出と

したトムは西洋社会に帰還し、それを生活そのものにしてしまったウィルトシアはイギリスへの帰郷を果たせない。ウィルトシアの西洋社会からの隔絶という結末は、19世紀後半の社会進化思想におけるゼノフォビアや反ポピュリズム、ひいては民族・階級の純潔性の維持という現象を包含しうる可能性をも秘めている。ナチュラルライゼーションはそういった政治性を包み隠し、秩序だった物語を指向する。

註

本論文は平成 17-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）、「英米文学テキストにおける南太平洋表象とそのナチュラルライゼーション」の成果の一部である。

- 1 20 世紀初頭には、ベアトリス・グリムショウなどの女性旅行家も南太平洋を訪れ、現地の珍しい風習を求めて旅をしているが、もはや新しい発見はなく、「かつて存在したとされる」喰人種を懐かしむような内容となっている。
- 2 クックらによる南海航海以前における、南太平洋とフィクションの関係についての論考はレニー、55-82 頁を参照。
- 3 スティーヴンソンは「ファレサアの浜」の執筆にあたって、作品が「最初のリアルな南海小説」(161) という自負を表明している。『南海にて』でメルヴィルが犯したハッパーの地名の誤表記をあげつらう (28) のも、彼がメルヴィルの存在を強く意識していたことの表れだろう。
- 4 マーティン・グリーンは『ロビンソン・クルーソー物語』において、「宣教師の殉教という英雄的な概念から、飽くことのないセックスという官能的な願望にいたる」(111) 夢想をもたらした物語舞台として南太平洋を規定し、性の空間としての南海を、フランス人探検家ブーガンヴィルにはじまり、ジョセフ・バンク卿やメルヴィルを経由し、西洋の概念のなかに取り込まれたと述べる。
- 5 スターマ、16 頁。
- 6 タヒチの女性の貞操観念とクックらによる観察については、スターマ、25-6 頁を参照。
- 7 デニング、157 頁。

- 8 『タイピー』の信憑性に関する議論の経緯は、ノースウエスタン・ニューベリー版の編集者追補を参照した。286-7頁。
- 9 クッツァー、i-ii頁。
- 10 メニコフ、86頁。
- 11 バリー・メニコフが「ファレサアの浜」におけるポリネシアの風習と、作者による実際の見聞との一致を詳細に検証する一方で、ニール・レニーは作品中のエピソードのほとんどがスティーヴンソンによるフィクションであると述べるように、作中のタブーの信憑性の解釈については批評家の意見が分かれている。しかし、スティーヴンソンの南海体験が、「ファレサアの浜」の執筆と密接に関わっていることは疑いようがないことから、本論文では物語のタブーを現実の風習と連動するものとして扱った。詳しくはメニコフ、83-8頁、およびレニー、215-6頁を参照。
- 12 フロイトの「トーテムとタブー」論におけるダーウィニズムの影響については、リトヴォ、99-102頁を参照。

参考文献

- Anderson, Charles Roberts. *Melville in the South Seas*. New York: Columbia UP, 1939.
- Ballantyne, R. M. *The Coral Island*. 1858. Oxford: Oxford UP, 1990.
- Bougainville, Lewis de. *A Voyage round the World*. Trans. John Reinhold Forster. 1777. New York: DaCapo Press, 1967.
- Cook, James. *The Journals of Captain James Cook on His Voyages of Discovery*. Ed. J. C. Beaglehole. Harmondsworth: Penguin, 1999.
- Darwin, Charles. *The Voyage of the Beagle*. Harmondsworth: Penguin, 1989.
- , *The Origin of Species*. Harmondsworth: Penguin, 1968.
- Dening, Greg. *Mr. Bligh's Bad Language: Passion, Power and Theater on H. M. Armed Vessel Bounty*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Dixon, Robert. *Writing the Colonial Adventure: Race, Gender and Nation in Anglo-Australian Popular Fiction, 1875-1914*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Edmond, Rod. *Representing the South Pacific: Colonial Discourse from Cook to Gauguin*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Freud, Sigmund. "Totem and Taboo." 1913. *The Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Vol.13. Trans. and Ed. James Strachey. London: The Hogarth Press, 1953.
- , "The Disposition to Obsessional Neurosis." 1913. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Vol. 12. Trans. and Ed. James Strachey. London: The Hogarth Press, 1953.
- Green, Martin. *The Robinson Crusoe Story*. University Park: Pennsylvania State UP, 1990.
- Grimshaw, Beatrice. *From Fiji to the Cannibal Islands*. London: Thomas Nelson and Sons, n.d.
- Kutzer, M. Daphne. *Empire's Children: Empire and Imperialism in Classic British Children's Books*. New York: Grand Publishing, 2000.
- MacDonald, Robert H. *The Language of Empire: Myths and Metaphors of Popular Imperialism, 1880-1918*. Manchester: Manchester UP, 1994.
- Maixner, Paul, ed. *Robert Louis Stevenson: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1981.
- Melville, Herman. *Typee: A Peep at Polynesian Life*. 1846. Evaston: Northwestern UP, 1968.
- Menikoff, Barry. *Robert Louis Stevenson and 'The Beach of Falesà': A Study in Victorian Publishing with the Original Text*. Palo Alto: Stanford UP, 1984.
- Rennie, Neil. *Far-fetched Facts: The Literature of Travel and the Idea of the South Seas*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Ritvo, Lucille B. *Darwin's Influence on Freud: A Tale of Two Sciences*. New Haven: Yale UP, 1990.
- Said, Edward W. *Orientalism*. 1978. Harmondsworth: Penguin, 1991.
- Smith, Vanessa. *Literary Culture and the Pacific: Nineteenth-Century Textual Encounters*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- Stevenson, Robert Louis. *Island Night's Entertainment*. 1892. *The Works of Robert Louis Stevenson*. Tusitala Edition Vol. 13. London: Heinemann, 1924.
- , *In the South Seas*. 1896. *The Works of Robert Louis*

Stevenson. Tusitala Edition Vol. 20. London:
Heinemann, 1924.
-----, *The Letters of Robert Louis Stevenson*. Ed. Bradford
A. Booth and Ernest Mehew. Vol. 7. New Haven:

Yale UP, 1995.
Sturma, Michael. *South Sea Maidens: Western Fantasy and
Sexual Politics in the South Pacific*. Westport:
Greenwood Press, 2002.